

## 〈人間福祉研究ノート〉

# 初期仏教における苦について

玉 井 威

### はじめに

苦（パーリ語 *dukkha*, サンスクリット *duḥkha* 以下、原語の表記はパーリ語による。）とその苦から解脱という問題は何よりも仏教の根本課題であって、仏教の開祖ゴータマ・ブッダが出家したのも、自分自身のまさにこの問題の解決のためであった。ここでは特に生苦 (*jāti-dukkha*)、つまり生まれることの苦しみとはいかなる意味か、また何故に生まれることが苦しみとされるのか、について考えてみたい。

### (1)

最初期の仏教聖典には、いたるところで繰り返し、人生は苦しみに満ちていること、命あるものは必ずいつかは老い、病み、死にいたるということが説かれている。例えば、『ダンマパダ』(*Dhammapada*) には次のように説かれている（数字は詩の番号）。<sup>(1)</sup>

合

この身は泡沫のごとくであると知り、かげろうのようにはいかない本性 (*dhamma*) のものであると、さとしたならば、悪魔の花の矢を断ち切って、死王に見られないところへ行くであろう。(46)  
花を摘むのに夢中になっている人を、死がさらって行くように、眠っ

ている村を、洪水が押し流していくように、花を摘むのに夢中になっている人が、未だ望みを果たさないうちに、死神がかれを征服する。(47、48)

うず高い花を集めて多くの華鬘をつくるように、人として生まれまた死ぬべきであるならば、多くのよいことをなせ。(53)

大空の中にいても、大海の中にいても、山の中の洞窟に入っても、およそ世界のどこにいても死の脅威のない場所はない。(128)

牛飼いが棒をもって牛を牧場に駆り立てるように、老いと死とは生きとし生けるものの寿命を駆り立てる。(135)

この容色は衰えはてた。病の巣であり、脆くも滅びる。腐敗のかたまりで、破れてしまう。生命は死に帰する。(148)

『スッタニパータ』(Suttanipāta)にも数多く説かれている。

生まれたものは、死を遁れる道がない。老いに達しては死ぬ。実に生あるものの定めは、このとおりである。(575)

熟した果実は早く落ちる。それと同じく、生まれた人々は、死なねばならぬ。かれらにはつねに死の怖れがある。(576)

執着(upādāna)に縁って生存が起こる。生存せる者は苦しみを受ける。生まれた者は死ぬ。これが苦しみの起こる原因である。(742)

ああ短いかな、人の生命よ。百歳に達せずして死ぬ。たとえそれよりも長く生きたとしても、また老衰のために死ぬ。(804)

同じような感慨は仏弟子の言葉と伝えられる仏典のなかにも見られる。

例えば『テラガーター』(Theragāthā)には、

死

昼夜は過ぎ行き、生命はそこなわれ、死すべき人間の寿命は尽きる。  
——小川の水のように。(145)

死と病と老との三者は、あたかも火むらのごとく迫って来る。これに抗うには力がない。これを逃れるには敏速さがない。(450)

生まれたものには、生の次に必ず死がある。生まれ、生まれて、こ

生まれたものには、生の次に必ず死がある。生まれ、生まれて、ここに死す。実に生命あるものには、このような定めがある。(553)

また『テーリーガーター』(Therīgāthā)には、次の言葉が見られる。

生あるものには死がある。手足を切断され、殺され、捕縛される禍もある。生あるものは苦しみに会う。(191)

このように、最初期の仏典は、人生は無常であり、常に死の危機があるということ、老若男女を問わず、生あるものには必ず老、病、死があること、つまり我々は、老い(jarādhamma)、病気になる(byādhidhamma)、死すべき存在(maraṇadhamma)、mortalであることを説いている。それはなにもこの世だけの生存の在り方に限らない。執着に縁って、また来世にも老、病、死を必然的に伴う生を結ぶ。つまり我々は生まれるべき存在(jātidhamma)でもある<sup>(2)</sup>。たとえ人生には表面的には楽しみに満ちていようと、老、病、死をまぬがれ得ないという意味で、究極的には人生は苦であることを承認さざるを得ない。『スッタニパータ』に次のように説かれるのは、同じ趣旨からである。

楽であろうと、苦であろうと、非苦非楽であろうとも、内的にも外的にも、およそ感受されたものはすべて、「これは苦しみである」と知って、滅び去るものである虚妄の事物に触れるたびごとに、衰滅することを認め、このようにしてそれらの本性を識知する。諸々の感受が消滅するが故に、修行僧は快を感じることなく、安らぎに帰している。(738、739)

他の諸宗教、哲学説から仏教を差異化し、その教義を特徴づけるものに、三相ないし四法印がある。その一つに「一切皆苦」がある。「一切」とはすべてのつくられた存在(法)をさすが、この場合、我々の経験を超えた存在一般、客観的自体存在ではなくて、意識に対して意味をもつ限りの存在、対意識的存在を指す。仏教ではこれを五蘊という。従って、「一切皆苦」は「人生は苦である」と言い換えてもよいであろう。この

六

「一切皆苦」は「人生は苦である」と言い換えてもよいであろう。このように見ることが、何よりもまず、人生に対する仏教の基本認識であり、基本命題であった。そしてこれが仏教の出発点であった。仏教はこの点に立ち、苦しみを考察し、苦しみを超克する道を見出したのである。初期仏教の教義の大部分はこの苦しみの考察から始まっている。

人生を苦と見ることは厭世的な考えのように見えるが、これは単なる情緒的な一時的感情からでた結論ではない。個別者としての自己の存在を自覚的に問い、主体的に反省していったとき、つまり実存の立場から人間存在をとらえるならば、何人と言えども、この結論を受け入れざるを得ない。しかしながら、仏教はこの点にとどまらないで、その苦しみを克服する方途を発見したのである。苦しみは決して存在に固有の本質的な特性とか、実体とかではない。存在にアプリオリにあるのではない。苦といえども縁起的なもので、超克し得るものである。ただ苦は大多数の人々によって感受される普遍的で、基本的な経験的事実であるので、ブッダはこのことを四つの聖なる真理（これを「四聖諦」という）<sup>(3)</sup>の第一に据え、苦の生成と消滅にいたるプロセスと方途を、残りの三つの真理で明らかにしたのである。それゆえに仏教は決してペシミズムではないし、ブッダはペシミストではない<sup>(4)</sup>。

仏教教義を特徴づける他の諸特徴である「諸行無常」（すべてのつくられたもの＝存在は移り変わっていくものである）と「諸法無我」（すべての存在は実体ならざるものである）は、あらゆる存在に固有の構造的性質と言ってよいだろうが、「一切皆苦」の場合はそれらとはいささか性格を異にする。何ゆえに、一切の存在は苦なるものとして感受され認識されるかをも視野にいれつつ、生苦の問題を、次節において考察したい。

(2)

四聖諦の第一である苦聖諦の説明として、苦が生、老、病、死の四苦、ないしはこれに怨憎会苦、愛別離苦、求不得苦、五取蘊苦の四を加えた八苦に分類されるが、生老病死については、先に見たように、何人にとっても、生まれてきたからには、いつかは必ず老い、病み、死ぬという苦しみに直面するという事態を指示している。老病死は人間存在に深くまわりついて離れない、人間存在の根差すものである。もちろん生を含めて老病死は、それぞれそれ自体は生理現象に過ぎない。それを苦と感じるのは、老いとか、病とか、死とかに人間が主体的・自覚的に立ち向かうときである<sup>(5)</sup>。それは身体的・肉体的な痛み、苦しみというよりも、死へと収斂していく不安の感情である。生の不安、人間の有限性に対する不安と言ってよい。万人の心の底に蟠っている漠たる不安、死への不安である。

老病死をこのように見ていったとき、それでは生（生まれるということ）はいかなる意味で苦とされるのだろうか。前節の詩句の多くに含意されているように、生それ自体が苦ではなくて、生まれるということが必然的に老病死を惹起するという点で、生が苦なのである。老病死に代表されるあらゆる苦しみは、この世に生まれるということに基づく。生まれなければ、当然のことながら、老病死苦は存在しない<sup>(6)</sup>。ずっと時代は下るが、Vasuvārman（婆薮跋摩）の著した「四諦論」という漢訳仏典に、同趣旨の記述が見える。

一切諸苦 以生為本 以生為因

矣

とか、

生者根苦 老病死等 為枝葉苦（正大大藏經第 32 卷 381b）

とあるのがそれである。つまりあらゆる苦は生が原因となっており、生が根本の苦であって老病死などは、それに比べれば枝葉の苦だと言っ

ているのである。生と老病死との関係をこのように理解するとき、生まれるということの中に老いること、病むこと、死ぬことが含まれている、あるいは生に内在していると言うことも可能であろう。

分類の最後に示された「五取蘊苦」は、要約すれば五蘊が苦であることを提示するもので、「一切皆苦」であることと同一である。五蘊 (pañcakkhandhā) とは、存在を構成する五つの要素で、色（物質）、受（感受作用）、想（表象作用）、行（意志作用）、識（認識作用）をさす。これで物質・精神の両面にわたる一切の存在を表すが、その場合、一切と言っても、前述のように、我々の経験を越えた存在一般をさすのではなく、外的世界と関連する経験的な人間存在を意味する。その五蘊は、それ自体は苦ではない。苦は五蘊に本来的に備わっている固有の特性とは言えないが、その五蘊を無常であり無我であると見ないで、我々の執著（取 upādāna）の対象となると、五蘊は苦となる。正確に言えば、五蘊は苦を生起させる基盤となる。無常なのに常であるとし、無我なのに我であるとして存在に執著し期待するとき、その期待に反する事態に出会うとそこに苦が生起するのである。このような執著（取）の対象となる五蘊（存在）を五取蘊 (pañcupādānakkhandhā) と呼ぶのである。老病死に代表されるあらゆる苦が生 (jāti) に基づいてあるように、五取蘊もまたあらゆる苦の生起の基盤となっているのである。

初期仏教の代表的な教義の一つである十二因縁説は、苦の生成と消滅の次第を十二の項目の因果の連鎖として体系的に述べたもので、無明 (avijjā) に始まり老死に終わる<sup>(7)</sup>。その老死の生起の直接の条件として生が説かれる。「生に縁って老死がある」と。この生 (jāti) も生まれること、さらに言えば五蘊として生まれることを意味すると考えてよいだろう。五蘊として生まれることが、のちに老死と出会うことになるのである。

(3)

この節では、これまで述べてきた生苦、五取蘊苦の意味するところを、  
発達した後の時代のパーリ論書の中で確認しておきたい。

『ヴィスッディマッタ』(Visuddhimagga)において、四聖諦中の苦  
聖諦を説明する中で、次のような記述がある<sup>(8)</sup>。

何ゆえに、これ(生)は苦であるのか。[生は]多くの苦の基  
(vatthu)たるものであるからである。

これに続いていくつかの苦の範疇とその説明がなされたあと、

ここにいうこの苦は——(中略)——地獄の苦、および善趣におい  
ても人間世界にて生起するところの入胎によるなどの種類の苦であっ  
て、そういう[苦の]基であるから[生は苦である]。

と述べられている。入胎によるなどの種類の苦というのは、このあと  
続いて出てくる説明によると、受胎から始まって出産にいたるまでの間  
に胎児が受けるさまざまな苦しみと、出産直後とその後人が受けるさ  
まざまな苦しみのことである。例示されたものから判断すると、地獄で  
受ける苦を含め、そのほとんどが身体上、肉体上の苦しみである<sup>(9)</sup>。確  
かに、五蘊として生まれるということは、精神的な苦のみならず、肉体  
的な苦も五蘊上に生起するし、dukkha(苦)を狭義で使った場合、身体  
上の(kāyika)苦しみに限定される。その際、精神的な(cetasika)苦  
しみはsomanassa(憂)などと表現される。『ヴィスッディマッタ』の  
註釈書では次のように説明されている。

ひたすら苦である地獄に生苦があり、悪業による生起のゆえに、他  
の悪趣(餓鬼、畜生)においても生苦があるとしても、楽に導く業  
によって生起した善趣に何ゆえ[生苦が]あるのかと言えば、後者  
の場合は、これは生が自性(本性)として苦であるから苦と言った  
のではない。というのは何か苦の感受と結びつく再生(結生)があ

るわけではないからである。そうではなくて、[生が] 苦の拠り所 (adhittāna) たるものだからである。そのことを示そうとして、[多くの苦の基たるものである] 云々と言ったのである。苦を自性 (本性) としないものも、間接的には (pariyāyato) 苦であると言われているから、苦を自性とするものを苦の語によって区別して、苦苦 (dukkhadukkha) と言ったのである<sup>(10)</sup>。

苦苦とは心身に受ける文字通りの苦痛をさす<sup>(11)</sup>。さて、この注釈書の説明によると、地獄とかその他の悪趣に生まれる場合には、生まれること自体が苦、とりわけ身体的な苦痛であるかのように述べられているが、注釈者の意図はそれよりも、人間界のような善趣に生まれる場合と同様、生まれることがその後の人生において、さまざまな苦しみとの出会いを準備するということにあるように思われる。なお本文中には、苦苦を直接苦 (nippariyāya-dukkha)、生などを間接苦 (pariyāya-dukkha) と呼んでいる<sup>(12)</sup>。

『ヴィスッディマग्ガ』では、詩句でもって地獄等の苦しみを述べた後で、次のように生苦をまとめている。

あらゆる苦は、いついかなるところにあらうとも、  
この生を離れてはついにあることなし。  
故に、大聖人（ゴータマ・ブッダ）はこの生をば、  
第一の苦と説きたもう<sup>(13)</sup>。

五取蘊苦についても触れておこう。

かくの如き人（ゴータマ・ブッダ）によりここに説かれたる生以下の苦、及び、説かれざるころの〔苦は〕すべてこれら（五取蘊）なくば存せず。

かるが故に、苦の終滅を示したもう大聖人は、  
要約して、これら（五取蘊）をもって苦なりと説きたもう<sup>(14)</sup>。

以上のように、生も五取蘊もともに苦の生起のための拠り所となり、

基盤となるものであることが明らかとなった。しかしこの両者は無関係ではない。生は必ず五取蘊という具体的な存在の生であり<sup>(15)</sup>、五取蘊は生を俟ってはじめて存在性を獲得する。ただ生は時間軸に沿って苦を生起せしめる根源となるものであり、五取蘊は空間的に苦を惹起せしめる母体となるものである。前者が実存的であるのに対して、後者は構造的と言えよう。

### おわりに

以上、生(jāti)を中心に考察を進めてきたのであるが、翻って、生苦が問題とされてきたのは、とりわけそれが我々の実存の問題と深く関わるからである。何人も生まれてきたからには、いつかは必ず、老い、病み、そして死を迎える。遺伝子の中にそのようにプログラムされていると言ってよい。これは万人周知の科学的、客観的事実である。しかしこれが、ひとたび自分の問題として立ちあらわれてくると、実存の問題となる<sup>(16)</sup>。存在一般には還元しえない極めて個別的な問題となる。そこに苦が生起することはすでに見て来たところである。生、老、病、死は肉体的(フィジカル)な苦しみの基底をなす実存的な苦しみであると言わなければならない。

しかしながら、ひとは生れ、老い、病み、死すべき存在であり、苦を受くべき存在(dukkhadhamma)<sup>(17)</sup>でありながら、このことを忘れがちである<sup>(18)</sup>。真の人間の福祉の実現をめざすならば、これらの実存的諸条件を回避してはならない。これらを回避した福祉は浅薄なものにならざるを得ないであろう。これらを見据えた上で、苦しみの克服が、つまりは幸せの実現がはかられなければならない。それはまた、ゴータマ・ブッダの教えるところでもある。

註

- (1) 出典からの引用は断りのない限り Pali Text Society 本による。  
なお『ダンマパダ』と『スッタニパータ』からの訳出文は、中村元訳『真理の  
ことば・感興のことば』、同『ブッダのことば』（ともに岩波文庫）による。
- (2) Cf. Majjhimanikāya, vol. I, pp. 161-162, etc.
- (3) 四諦ともいう。迷いの生存は苦であるという真理（苦諦）、欲望の尽きないこ  
とが苦を生起させているという真理（集諦）、欲望のなくなった状態が苦滅の  
理想の境地であるという真理（滅諦）、苦滅にいたるためには八つの正しい修  
行方法（八正道）によらなければならないという真理（道諦）の四つである。  
これはしばしば治病原理になぞらえられる。まず人の今の苦なる境遇を述べ  
（pathological 病理学的）、次にその原因を述べ（diagnotical 診断的）、次  
にそれからの解脱を述べ（ideal 理念的）、そして最後に解脱に至る道を述べる  
（prescriptive 処方的）。
- (4) ゴータマ・ブッダ在世の時代からすでに、仏教以外の宗教家、思想家から同様  
の評価がなされている。例えば、Majjhimanikāya (vol. I, p. 140) に「沙門  
ゴータマは虚無論者（Venayika）である。存在する衆生の断滅、破壊、非有  
に教えている。」という沙門（自由思想家）とバラモンからの誹謗の言葉と、  
これに対し、ブッダは自分は虚無論者ではないとして「私は過去に、また現在  
に、苦と苦の消滅を教えたのだ。」という言葉が紹介されている。
- (5) 佐々木現順『原始仏教から大乘仏教へ』（清水弘文堂、東京、昭和 53 年）44  
頁参照。
- (6) このあたり、古代ギリシャの悲劇作家ソポクレスの「コロノスのオイディプス」  
の中の舞唱団（コロス）の歌に出てくる言葉「生まれぬことが最善。しかし、  
ひとたび生まれたからには、一刻も早くハデスの門をくぐる（死ぬ）こそ  
次善」を思い起こさせる。これは古代ギリシャ人の心底に通底するひとつの時  
代精神であったと思われる。
- (7) 12 とは、無明（無知）、行（潜在的形成力）、識（識別作用）、名色（名称と形  
態）、六処（六つ感官）、触（接触）、受（感受作用）、愛（渴愛、欲望）、取  
（執著）、有（生存）、生、老死である。
- (8) Vism. p. 499.
- (9) 生苦を肉体的・身体的な苦しみと理解する例は古くから仏教聖典にも出てくる。  
この点について詳しくは、畝部俊英「＜研究ノート＞「生苦」をめぐる」  
（同朋学園仏教文化研究所紀要第 9 号所収、1987 年）参照のこと。
- (10) Paramatthamañjūsāṭṭikā (ed. Rewatadhamma), p. 1124.

## 初期仏教における苦について

- (11) 苦苦に対しは、壊苦 (vipariṇāma-dukkha) と行苦 (saṅkhāra-dukkha) が説かれる。壊苦とは、ものが変化するという視点から苦を見出そうとするもので、楽と感受される対象も変じ壊れていくことで苦となることをいう。行苦とは、存在性 (つくられたもの) という視点から苦を言おうとするもので、楽でも苦でもない対象に適用される。苦苦と字を重ねるのは強意 (emphatic) である。
- (12) Vism.p.499.
- (13) Ibid.p.501.
- (14) Ibid.p.505.
- (15) Sārāththapakāsinī, vol. II, p.54. には「生とは変化を有する蘊の生である。」とあり、Sumaṅgalavilāsinī, vol. III, p.797. には「生とは変化を有する、最初に生起した蘊の名称である。」とある。
- (16) 20 世紀の実存哲学者ハイデガーは、人間を、死にさらされた自己の存在を自覚する存在という考えにたって、「死へと関わる存在 (Sein zum Tode)」とした。(『存在と時間』)
- (17) Cf. Sārāththapakāsinī, III, P.53.
- (18) 中世ヨーロッパで黒死病 (ペスト) が猖獗をきわめていた頃、「死を憶えよ」(メメント・モリ *memento mori*) がその時代の最大の標語であった。これは死が日常茶飯事であった当時の時代状況が反映していると思われるが、この主題は早くも 13 世紀 (黒死病流行以前)、フランスで成立した伝誦詩「三人の死者と三人の生者の話」にとりあげられている。木間瀬精三氏によると (『死の舞踏』中公文庫)、この伝誦詩の起源をインドに求め、それがシリア経由でフランスにもたらされたとされる。明らかに「ブッダ伝」をもとにして造られたキリスト教の聖者伝「バルラームとヨサファット」(貧、老、病、死が主題となっている。) との類推から、伝誦詩のインド起源を推定されるわけだが、いずれにせよ、ここで取り上げられる主題には『ダンマパダ』等の初期仏教聖典の中心テーマと一脈通じるものがある。

(本学教授・仏教学)